

Title	ベルクソン哲学における科学の位置付け
Author(s)	陀安, 広二
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2000, 34, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7414
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ベルクソン哲学における科学の位置付け

陀 安 広 二

科学知と哲学知の関係は哲学史を通して議論の対象になってきた。たとえば、アリストテレスによる学知の分類やデカルトの構想した「哲学の樹」の構造が示すように、科学に一定の信憑性を認めつつも、それを哲学知に従属させ、哲学という総合的な学問の一領域に限定するという考え方があある。あるいは、科学の実証性を前面に押し出し、科学的認識こそ学知を基礎づけるものであるとする科学的合理主義の立場、またその反対に、科学知の規約性・相対性を指摘する批判的立場がある。ベルクソン哲学が科学をどう捉えたか、これが本論のテーマであるが、直観の哲学・生命の哲学と形容される点に鑑みれば、その基本的立場は科学批判にあると見るのが自然のようにも思われる。しかし事情はもう少し複雑である。

『意識の直接与件についての試論』（以下『試論』と略記）でベルクソンは、意識事象を量的に取り扱う精神物理学や力の保存原理を普遍化する物理学に対して批判を行っている。しかし一方、『物質と記憶』では、純粹記憶の実在性の一つの傍証として失語症に関する生理学の所見をとりあげており、また物質の本性を非物体的に捉える彼の見解が当時の第一線の物理学によって裏打ちされることを指摘してもいる。さらに、身体という特異点を基準として意識によって把握される世界と並んで、身体もまたその連鎖のなかに相対化される自然法則に基づく世界、科学の扱う世界が存在するということが肯定される。こうした点を考慮すれば、ベルクソンにとって科学とは、全体として単に退けられるべき、あるいは反対に全体として

肯定されるべき一枚岩ではないと考えられるだろう。ベルクソンは科学のいかなる点を批判し、また同時にいかなる点で科学をその哲学のうちに肯定的に定位させ得たのか。

科学知は相対的か

『形而上学入門』でベルクソンは、分析知について次のように述べている。直観と「反対に、分析は対象を既知の要素、つまり当の対象と他の対象とに共通な要素に還元する操作である。ゆえに、分析するとは、或るものをそのものではないものによって表現することである」(1395-1396)。

「……実証科学の通常の働きが分析であることは容易に分かるだろう。よって実証科学は何にもまして記号上で働くのである」(1396)。科学が分析という方法をとる以上、科学知は対象を直接把握するのではなく、記号を媒介にして働くのであり、結局この認識は「相対的なもの *le relatif*」(1393)にとどまるとされるのである。しかし別の箇所では、一転して科学知の絶対性が主張されてもいる。たとえば『序論第二部』のこのような記述。「我々は物質の科学が絶対 *un absolu* に達しない理由を理解できない」(1280)。

「我々は科学者の大部分に比べて科学を低く見ているのではなく、現代の人々が理解するような経験に立脚した科学は実在の本質に到達し得ると考えている」(1285-1286)。

ベルクソンの言説のこの表面的な相違は、学知の用いる方法とその扱う対象を峻別することによって、整合的に理解されなければならない。すなわち、形而上学が直観という認識方法を用いて精神を対象とするのに対して、科学は分析ないし知性という認識方法を用いて物質を対象とするのであり、形而上学及び科学は、その固有の認識方法によってその固有の対象を扱う限り、どちらも絶対的認識を獲得し得るのである。「こうして我々は形而上学に限られた対象として特に精神を割り当て、特殊な方法として何

よりもまず直観を割り当てる。そうすることで我々は形而上学と科学を明確に区別する。だがそれによってまた、それらに対等の価値を与えるのである。我々は形而上学と科学はどちらも実在の基底に触れることができる。哲学者が主張し、科学者が認めた、認識の相対性と絶対的なものへの到達不可能性のテーゼを我々は拒否するのである」(1277-1278)。したがって、ベルクソンが科学知の相対性を指摘するとき、その論点は、科学が物質という自己本来の対象から持続や生命といった管轄外の対象へと知性的認識を不当に拡張するという点にある¹⁾。『試論』の精神物理学に対する批判は、まさに精神を「もの」の論理に即して「もの」同然に扱う科学の姿勢に対する批判であろう。このように越境的に働く限り、科学知は対象に対して相対的にならざるを得ないのである。しかし一方、翻って見れば、「無生の物質というその固有の領域から外に出ない限り、理論上、実証科学は実在そのものに関わる」(670-671)とすることができる。知性という認識方法によって物質を対象として扱う限り、科学的認識は絶対的であり得ると考えられるのである²⁾。

科学知の絶対性 — 知性と物質の整合性

ところで、知性によって物質を把握する限り、科学はなぜ絶対的認識たり得るのだろうか。言い換えれば、なぜ物質は科学にとってその固有の領域であり得るのだろうか。実際、問題を物理学に限定してみたところで、科学法則が単に約束事にすぎないという規約主義的な考え方は珍しいものではないだろうし、そうした立論自体は可能だろう。科学の方法とその及ぶ範囲を限定すること、単にそれだけで、なぜベルクソンは規約主義の陥穽を跳び越えて科学的認識の絶対性を主張するに至ったのか。

その理由は、科学の対象である物質と科学の認識方法である知性との間に、「符合関係 symétrie」(1279)、「整合性 concordance」(*ibid.*)、「対応

correspondance」(ibid.)が存在するとベルクソンが考えていることにある。この「整合性」の存在が、ベルクソン哲学において、科学知の恣意性・規約性・相対性を否定するものとなっている。「……もし物質に関して我々の感官に対して与えられるその表層的な印象しか考慮しないなら、そしてもし我々の知性をそれが日常働く際に持つあいまいで不鮮明な形態のままにしておくなら、我々は物質と知性の間に隔たりがあると考え得るだろう。しかし知性をその明確な輪郭に戻すなら、また、感覺的諸印象を十分掘り下げ、物質が我々にその構造の内部を明らかにし始めるなら、我々はそのとき知性の分節が物質の分節に正確に適合するようになるのが分かるのである」(1280)。問題は、感官に対して現れる物質の表層を穿ち、知性の明確な輪郭を描くこと、すなわち、通常我々が所与と見なして受け取っているものの根源を発生論的に究明することである。「物体の発生 *genèse* と同時に知性の発生に着手することにしよう。二つの企ては明らかに相関的なのである……」(653)。

ベルクソンは、このような発生論的試みが直ちに批判を招くだろうと述べている。何であれ「発生」を問題にするという姿勢そのものが、最も大胆で無謀な形而上学の議論のさらにその先を行こうとするかのように思われるからである。しかしそれは見かけ上のことにすぎない。なぜか。心理学、宇宙進化論 *cosmogonie*、伝統的形而上学は、ベルクソンの見るところ、少なくとも「その本質的な点において知性を所与とすることによって *par se donner l'intelligence dans ce qu'elle a d'essentiel*」(654) 出発する。人間の知性を動物の知性からの漸進的発達によって説明しようとする心理学。様々の物体や事実をそのまま自然の構成部分として受け入れたうえで、それらの分節に応じた仕方では知性を導き出そうとするスペンサーの進化論哲学。思考のカテゴリーをアプリアリに演繹しようとする(カントの)形而上学。ベルクソンによれば、これらはいずれも、慎み深いことに、それ

それぞれの仕方では知性を「所与として」認めている。しかし、実はそこには、知性の把握するものは「把握可能なものの総体」(657)であるはずだという共通の要請が働いている。このようにひとたび知性的認識を経験の全体と一致させてしまえば、両者の一致をそれ以上遡行不可能な所与と見なすこともできるし、また、経験の外部を仮定し、この外部との関係において認識自体を相対的なもの、すなわち主観的構成と見なすことも自由である。ベルクソンに従えば、こうした考え方は知性をそれ以上還元不可能な与件として受け入れることを前提している。認識のメカニズムを明らかにするためには、この前提を解体し、知性の「発生」を辿る必要があるのである。

ベルクソンの示すところによれば、知性とは或る関係や形式についての認識であり、特に、関係する項を持たない関係、内容なき形式についての生得的な認識である (cf. 619-623)。知性は関係や形式といった「非有機的な、つまり人為的な道具を製作する能力」(622)であり、そのようにして「提示された枠に最も有用なもの、すなわち最もよく当てはまるもの」(*ibid.*)を探る能力である。「知性は与えられた状況とそれを利用する手段との関係に本質的に関わっている」(622-623) と言えよう。知性の目的は「純粹思弁」(623) や「純粹理論」(626)にあるのではなく、本質的に実践的な関心の下にあるのである。言い換えれば、人間知性は「行動の必要に相關的」なのである。このように知性を行動の必要から導出すること、それが知性の起源を発生論的に辿るということの内実である。知性を自足したアプリアリなカテゴリーの布置と見るのではなく、自然の構成部分と見なされた物体の分節から知性を再発見するのでもない。「行動を措定すれば、知性の形式そのものがそこから導き出される。ゆえにこの形式は還元不可能なものでも、説明不可能なものでもない。知性の形式が独立したものではないからこそ、認識は知性の形式に依存しているとはもはや言えまい。認識は知性の所産ではなく、或る意味で実在の構成部分になるのである」(624)。

しかし依然として疑問が生じよう。知性の形式が「行動の必要に相関的」ならば、だからこそ、科学的認識は恣意的・規約的なのではないだろうか。実際ベルクソン自身その規約性を認めている。知性は行動の必要に応じて物質を裁断するが、裁断は無限に行われることが可能で、知性にとって物質は「任意に裁断可能 *taillable à volonté*」(627) であると見なされている。知性はこのように「任意の法則によって分解し、任意の体系に再構成する際限なき能力」(628) である。こうした知性の本質に依存する限り、科学はひたすら暫定的な用語で問題を順次立てざるを得ない。問題の解決は次に来る問題の解決によって絶えず修正されなければならない。科学は問題の立てられる「偶然的な順序」(670) に相関的だと言わざるを得ない。結局、科学的認識の「人為的な」(680) 側面を否定することはできないだろう。ところが、ベルクソンの見るところ、科学知のそうした規約性は「事実上」の事柄であって、「権利としては」そうではない(670)。科学的認識はたしかに「近似的 *approximative*」であるが、「相対的」ではない (*ibid.*)。なぜだろうか。

物質と知性との「整合性」の問題に戻ることにしよう。この「整合性」は、知性及び物体の起源の発生論的な解明を通して明らかにされると考えられる。知性は「行動の必要に相関的」であり、その形式は我々の物質に対する働きかける能力によって説明された。では物質はどのように規定されるだろうか。それは諸物体の集合、諸要素の全体ではない。諸物体や諸要素といった表象は、我々の物質に対する働きかける能力によって裁断された結果生じるものにすぎず、「物質に関して我々の感官に対して与えられるその表層的な印象」でしかない。また、諸物体が切り出されてくる、それ自体は無記名の何らかの素地、すなわち任意に分割可能な純粋空間から物体が「発生」してくるのでもない。無限分割を許す純粋空間の連続性は、むしろ非連続性の表象から派生する表象だからである (cf. 625-626)。

ベルクソンによれば、物体の「発生」の場はこう描写される。実のところ、「物質は純粋な等質空間と完全に合致することはないが、そこへ至る運動によって構成された」(680)。科学はこの運動を延長し、運動の終端すなわち等質空間において諸物体を裁断する。物質がすでに純粋な等質空間に至る運動であるならば、科学がその運動をさらに引き延ばし *prolonger*、運動の終端を「図式 *schéma*」(667) 化して示すとしても、科学は物質の本質的なものを部分的に、かつ先鋭化して実現していると言えるだろう。空間へ至る運動を分有するという仕方で、物質と科学は「整合性」を保っていると考えられる。科学知が「近似的」であれ「相対的」ではないという主張は、この点に依拠しているのである。

認識論は説明のための一般的構図を描いてみせる — 精神が事物に適合するのか、事物が精神に適合するのか、それとも精神と事物の間に神秘的な整合性が仮定されるのか。しかし、ベルクソンは第四の可能性を提示する。「解答はこうである。物質が知性の形式を決定するのではなく、知性がその形式を物質に課するのではなく、物質と知性が不可解な予定調和によって適合したのでもない。知性と物質は漸進的に相互適応して、最終的に共通形式 *forme commune* にたどり着いたのである」(670)。認識の形式が先か質料が先か、こうした問いはベルクソンにとって意味をなさない。「この適応はまったく自然に *tout naturellement* 行われただろう。精神の知性面 *intellectualité* と事物の物質面 *matérialité* を同時に創造するのは同じ運動の同じ反転だからである」(*ibid.*)。積極的な運動の反転が「それ自身で自ずから *d'elle-même*」(681)、「自動的に」(682) 物質と知性を同時に形作るのである。両者は、積極的な運動・精神の運動の弛みあるいは不在という「同じ本性 *même nature*」(681) を基調として生成するというただその一点において、整合的に共通形式へと帰着するのである。

哲学と科学

したがって、科学の「進歩 progrès」(680)があるとすれば、それは共通形式へのさらなる収斂、物質との近似性のさらなる増大に存すると考えられる。

反対に科学の「進歩」が妨げられるとすれば、それは第一に、科学本来の目的、知性という方法で物質を把握するという目的が果たされないということの意味するだろう。これは、すでに見たように、知性が生命・持続といった管轄外の対象に越境的に働くということである。知性は「生命に対する本性的な無理解」(635)を特徴とするため、生命を対象として扱うことそのものが科学の本性に背くことであり、その限りにおいて規約性・相対性を露呈することになるだろう。知性は生命を対象とするとき、生命を物質と同じ仕方で扱う。「しかしそのようにして到達する真理は、我々の行動する能力にまったく相対的である。それはもはや記号的真理でしかない」(661)。この生命に対する科学的認識の相対性は、物質に関する科学的認識の近似性と根本的に異質である³⁾。物質が、行動の必要に基づいた知性の分割作用に完全には従わないにせよ、少なくとも「同じ本性」を持つという仕方でその作用に対する準備をその構造のうちに蔵しているのに対して、生命は知性という異なる本性の下にある働きに対して抵抗するので、知性はせいぜいその「外的様相」(*ibid.*)をひたすらかき集めることに終始するほかないからである。たとえば、科学は生物を細胞の集積へ、そして細胞のなかに発見されるさらに微小な要素へ分解していく。だが、たまたごうした下位分割の終局において有機体の実質が或る種の「連続」であると考えられ、細胞が「人為的抽象物 *entité artificielle*」であると見なされとしても、こうした見方は、科学が生命に対する無理解という自己の本性に従いつつ「自己自身を深めて」行き着くものでしかない以上、「生物につい

でのもう一つの分析形態」であり、「連続」といっても名ばかりで、単に「新たな不連続」でしかないのである（632-633）。

「進歩」の停滞の第二の原因は、科学がそれと知らずに疑似科学を自らのうちに取り込んでしまうことにあると思われる。「我々は科学に対して、科学的であるように、また、無学の人や似非科学者に科学の仮面をつけて現れる無意識の形而上学を混入させないように、望むことしかしなかった」（1308）。科学を装った「無意識の形而上学」すなわち「科学主義 scientisme」（*ibid.*）は哲学の領域を席卷したのち、間接的に科学そのものを欺こうとする。たとえば記憶や観念に関する局在説——記憶や観念の貯蔵される脳の部位を限定しようと努める科学をとりあげてみよう。局在論的生理学は、実は、心理事象を「もの」として取り扱ってよいとする「精神生活についての連合主義的想念」（269-270）、言い換えれば「一種の形而上学的偏見」（270）に欺かれており、その結果、記憶や観念を「もの」に還元したうえで、それらの鎮座する脳の部位を規定しつつ、それを「科学的な」解明と称することになる。科学の名を騙る疑似科学、「粗悪な形而上学」（1308）は、もちろん、それもやはり知性の産物ではある。しかしそれは、等質空間へ向かう運動を暴力的にひたすら押し進めた結果構築され、物質と可能な限り整合的であろうとする配慮を欠いた単なる「科学（中心）主義」でしかないだろう。物質との共通形式に漸進的に収斂することによってこそ、科学の「事実上の」規約性は無限に取り除かれ、科学の「進歩」もあると考えられるのである。

さて、ベルクソンに従えば、形而上学すなわち哲学が科学の「進歩」を促すと考えられる。より正確に言えば、哲学と科学は相互に協力してより深い認識へ進んでいく。「それらは相互に共同的・漸進的な努力によって成熟する」（1307）のであり、ベルクソンの考える哲学とは「科学の制御に従い、また科学を進展させ得る哲学」（1308）なのである。

実のところ、哲学と科学の間には「威厳の相違 *différence de dignité*」(1286)があるのではない。科学から諸事実や諸法則を受け取ったうえで、認識能力の批判を行う、あるいは形而上学的な真理を構築する哲学を仮定してみよう。認識の材料に関して、それは「科学の管轄」(660)だと言うだろう。しかし、科学の見出す「諸法則は、諸事実内に在的であり、実在を判明な諸事実に分断するために辿られる線に相対的である」(*ibid.*)から、哲学の受け取る認識の材料はすでに「実在に対する科学の態度」(*ibid.*)によって悉く歪曲されている。事実問題を科学に、原理問題を哲学に割り振ることで哲学を科学より高次元に据え置こうとすれば、かえって両者をもとに損なうことになるのである——低次元の認識としての科学、書面の内容の真偽を問わない無責任な書記局としての哲学、として。ゆえに、「形而上学は実証科学より優位にあるのではなく、科学の後にやってきて同一の対象を考察し、そのより高次の認識を得るのではない」(1286)⁴⁾。

哲学と科学が「相互援助 *aide mutuelle* と相互制御 *contrôle réciproque*」(*ibid.*)をなし得るのは、このように、両者が「同一の水準に」(*ibid.*)置かれ、それぞれが「実在の一部」(*ibid.*)に——哲学が精神に、科学が物質に——しか関わらないとされた場合である。そのとき、哲学と科学にとって「共通の境界 *frontière commune*」(1308)が開かれる。この「共通の境界」に沿って、両者は相互の知見を突き合わせ、「検証 *vérification*」(*ibid.*)に計ることができる。実際、境界線が浮かび上がるためには、両者を混同せず、あらかじめ相互に識別できていなければならないから、こうした「共通の境界」が開かれるとすれば、それはまさに哲学と科学を、その方法と対象に関して明確に区別するときであろう。

こうして、「科学と哲学の連帯した漸進的な発達」(664)によって、両者は「存在そのものの様々な深み *l'être même, dans ses profondeurs*」(*ibid.*)へ近づいていく。たとえば、ベルクソンは、不動性や不変性が運動

や変化に対してとられた視角、運動の支持体 support にすぎないということを示すことによって、物質の構造についての考え方を刷新しようとしたが、それと並行して、今度は物理学の側から、物質の構造を波と粒子との一種の融合において捉えようとする考え方が生まれつつあった。彼が言うには、「物理学は、遅かれ早かれ、要素の固定性のなかに運動性の一形態を見るように導かれるだろうと思っていた」(1313)。事実がどうであったかは措くとして、少なくともベルクソンは、哲学の知見と科学の知見が相互に擦り合わされ、検証されることによって、学知は全体として発展していくと考えているのである。

事実問題にはかかわらず、科学と哲学の相互協力について、物質認識を例として原理的に考えてみよう。科学は、物質の持つ純粋な等質空間へ至る運動をさらに引き延ばし、その終端において物体・粒子・要素を切り出してみせる。すなわち、単なる傾向でしかなかったものを、その傾向の延長上において観念的に実体化して示すのである。ともに等質空間へ至る運動のうえに身を置いているという点で、知性の分節は物質の分節に部分的に合致するとはいえ、身を置く地点の隔たりが知性による物質認識を「近似性」に留める。我々の見るところでは、この「近似性」を絶対性へ近づけること、知性が等質空間へ至る運動上に占める位置を可能な限り物質のそれに接近させること、その点に科学の「進歩」がある。哲学が科学を「進歩」させるとすれば、それは他でもない、科学に対して物質をありのままに示してみせることによってであろう。つまり、純粋な等質空間へ至る運動のまさに途上にある物質を、完全な空間性とは合致せずに空間性以外の剰余を含んでいる物質を、それとして提示することである。

ベルクソンによれば直観の対象は拡張され得る⁵⁾。「直観の固有の領域は精神であるから、直観は事物のなかに、物質的事物のなかにおいてすら、精神性の分有 participation à la spiritualité を把握しようとするだろう」

(1274)。物質のなかに分有される精神性、空間性以外の剰余が、物質を純粹な等質空間に合致させることなく、ただそこへ至る運動の途上に留めおく当のものであろう。直観すなわち哲学的認識は、この精神性の分有を明らかにする。こうしてベルクソンによって示されるに至ったのが、分割されざる延長、「變動する連続性 *continuité mouvante*」(333) という物質観である。科学は物質と可能な限り整合的であろうと、より高い「近似性」を獲得しようと努めることで、こうした哲学の知見を再発見することになり、それによって鼓舞されるだろう。また反対に哲学も、科学の「進歩」、「外的経験の進歩」(1314) が明らかにする結論によって「確信の力」(1316) を得ることになる。

しかし、こうして科学が哲学の援助を得て「進歩」していくとしても、知性のそもそもの起源を再び問題とするなら、科学の「進歩」は知性自身のはらむ本能の痕跡、原初的直観の痕跡の錬成にあると考えられるだろう。すなわち、ベルクソンによれば、本能と知性は共通の起源から発出し、それぞれ異なる認識能力として限定されてきた。この限定を解き放ち、それぞれに残存する他方の認識能力の残滓を発展させることができれば、本能と知性はそれぞれの難点を克服することができる。知性は「発展し *développée*、矯正され *redressée*」(645) ることが可能なのであり、言い換えれば、「意識のなかに依然として眠っている直観の潜在性を目覚めさせること」(650) ができるのである⁶⁾。哲学との相互協力に加えて科学の「進歩」を一方で支え得るのはこうした知性自身の自己修正であると考えられる。

結びにかえて

以上、科学的認識の妥当性についてベルクソンの見解を追ってきたが、そこに見られた認識の相対性の否定は、直観知の拡張性というベルクソン哲学の根本テーマと無関係ではない。すなわち、直観知の直接的対象であ

る内的持続から、持続の緊張度の転調によって、生命の持続や物質の持続へと到達することができるという主張の背後にあるのは、我々の認識があらゆる存在に向かって開かれているという信念、我々の経験が絶対的であり得るとする信念である。「實在に関する我々の認識は限定されて *limitée* がありますが、相対的ではありません。認識の限界は無限に遠ざけられ得るでしょう」(M774)。ベルクソンの科学論は、こうした認識の拡張性を別の仕方で展開したものであるとすることができよう。

注

ベルクソンの著作からの引用・参照は、『生誕百年記念版著作集』(*Euvres*, PUF, 1991.)、『雑録集』(*Mélanges*, PUF, 1972.) の頁付を本文中に挿入することで示す。なお雑録集には記号Mを付す。

- 1) 事実、『試論』の自由論の一つの論点は、力の保存原理を自然の(生物を含めた)すべての物体に「拡張すること *extension*」がそれ自身「何らかの心理的理論 *quelque théorie psychologique*」を含んでいないかどうか問うことにあった(99, cf. 103)。科学批判はまさに本論で我々が指摘することになる科学の「越境性」と誤謬を生む「無意識の形而上学」に対してなされているのである。
- 2) 「科学が相対的に、というよりむしろ記号的になるのは、生命や意識の問題に心理・生理学的な側面から取り組むときだけなのです」(M747)。
- 3) 物質を含めたあらゆる存在は「持続の相の下で」把握され、或る意味で一元化されることによって、直観の対象になり得る。物質が持続するという見解はこうした観点から述べられたものだろう。しかし、だからといって逆に、生物を含めたあらゆる存在が非持続的な相の下で、つまり物質的相貌で把握され、結局、科学の生命認識の相対性とその物質認識の近似性が程度の差異に還元されるとは言えまい。対象を非持続的な相の下で捉えるということは、対象を否定的・消極的に捉えるということであり、科学は生物の物質的構造をどんなに明らかにしたところで生物の肯定的な把握には至らないだろう。
- 4) 「科学への非難、科学の形而上学への不可解な従属を問題にされていますが、いつ、どこで、どんな形で、私がそのようなことを述べたというのでしょうか。私が書いたもののなかで、そのように解釈され得るものを、

一行でも、一語でも示してみてください」(ibid)。

- 5) cf. 1272 et suiv., 1405 et suiv.
- 6) ベルクソンにとって直観と知性是对立的ではない。これは反省としての直観 (cf. 1328)、そして我々が本論で見た科学知の絶対性から明らかである。ベルクソンは決して「反知性主義者 l'anti-intellectuel」ではない (M755-756)。

(大学院後期課程学生)